

後楽園の成立とその戦略 -<庭>空間としての水田

Construction and its Strategy of the KORAKU-EN -Rice Fields as a Multiple Functional Space of the DAIMYO Garden

小野 芳朗

By Yoshiro ONO

ABSTRACT

KORAKU-EN (GOKOH-EN) in Okayama was established in the GENROKU Era, 1689 as a garden for Daimyo by Brigadier General Tsunamasa Ikeda-Matsudaira. KORAKU-EN was used for the Play, Art and Life of the Ikeda Family. The space of garden became to lawn yard after Meiji revolution. The beginning of the history of the garden, rice field was spread on the space and farmers work there and natural water was derived in the garden through the artificial canal. These facts are investigated and analyzed by using documents of the library of Okayama University, the Ikeda families' archives. The strategy of the garden would be designed as the center of the national management on the Ikeda families.

1. 結論

岡山後楽園（以後、歴史的論考を展開する場合には、成立時の名称をとり「御後園」と称す）は元禄年間に、備前池田藩岡山城の東後背地の旭川東岸に建設された。こうした大名庭園は、現代は観光地として位置付けられている。明治四年（1872）に「後楽園」と命名されたそれは日本三名園のひとつに数えられ芝生の美しい庭園として知られる。現在のそれは観光の視線で語られ、芝生の広がりや四季の花々、庭園を流れる曲水や御茶屋がかつての大名庭園を偲ばせることで、背景となる復元された岡山城天守閣とともに愛でられている。近年は、夏の「幻想庭園」ライトアップなど観客にうけるイベント行事が盛んに催される。

しかしながら、大名庭園は大名の楽しみのものであったばかりではなく、庶民にも開放されていた事実は一般には知られていない¹⁾。また近年の観光の視線、つまり視覚的空間として広く認識されている庭は、かつては芸能や軍事訓練、そして水田が広がる生産現場であった事実が、観光行政の現場でも巷間にのぼるような話題ではないようだ。

大名庭園が、大名を含む一部武士階級の独占空間であり、それらが近代以降地方政府に払い下げられて広く「解放」されたとする史観は、その後の同じ空間に建設された博物館や美術館、動物園などを大名庭園＝閉鎖空間を破壊した産物として近代史に記述するきらいがある。そこには近代は、近世に比して開放的だという即物的史観があり、その故に近代に出現する空間の意味を近世的意味とは断絶して捉え、近代は発達したものという根拠のない史観を提示しがちである。岡山後楽園も明治四年に岡山県に池田家から移譲された後、県の官舎や物産陳列

「近代的空間」への構築物であるが、要諦は大名庭園という空間の歴史的意味を明らかにした上でないと、都市に共通する「博覧会場」「物産陳列場」「博物館」などの公共空間の出現の意味を読み違えるのではないかと、いうことである。

大名庭園に関する論考として白幡洋三郎の「大名庭園」は庭園を「遊びの場」とであるとみた初期のものである。庭園が視覚的空間であるという現代のとらわれた観光の視線から脱却し、それらが多彩な芸能や「見立ての風景」、いわゆる「あそび」の場として利用されていたことが指摘されている²⁾。

網野善彦が都市の周縁部にできる芸能集団の興行する場を<庭(ば)>と呼び、市場＝市庭で興行される芸能について論考しているが³⁾、大名庭園はこうした都市の境界の出現する市や境内にあった「あそび」の<庭>の機能を取り込んだ空間と考えることができるかもしれない。そこには芸能者が集まり、様々な商人や客が出入りした。城内という公式の場ではない場所でのある意味、<情報のつぼ>としての<庭>が展開されたと考えている。近代以降の箱物建築物の出現は、それ故<庭>としての機能の「設定の変更」とみるべきかもしれないが、本稿ではそこまでの論考は控えることとする。江戸時代の<庭>はまた、愛でるだけの空間ではなく、軍事訓練や水田菜園という生産現場として機能していたことがわかっている。意味もなく水田空間が庭園面積を占めるはずはなく、水田が存在したという事実は藩の意図があったと考えるのが自然である。この点、白幡はその著書²⁾の中では記述が曖昧である。御後園の図面を岡山大学附属図書館「池田家文庫」の図面に依りながら、そして水田の存在には気がついていたら考えられるが、水田は武士階級がかつて農耕者であったその武士精神を庭園に取り入れたとか、田園趣味だとしているが、これではあまりにも説明が荒すぎる。

小野良平は、小石川後楽園（水戸藩）が神田上水を導

keywords 岡山後楽園、水田、池田家文庫

正会員、工博、岡山大学大学院環境学研究科

場がその空間に出現する。それは他の都市でもみられる

水し、かつ江戸の貯水池として機能したという。これは江戸の大名庭園が大名の趣味の場であっただけではなく、都市の機能との関連性に於いて存在する場であったことをいう⁴⁾。小石川後楽園も水田や庭の木々を建築物に使用するなど、生産財としての機能も持っていたとされる。このように大名庭園は、都市機能、特に水の利用の中で捉え直す必要があると共に、庭園そのものの持っていた役割を知ることは、その技術的ツールとしての土木・建築技術の検証も含め重要な作業となることが考えられる。

本稿では、岡山後楽園、御後園の利用形態を検証していく諸段階の端緒として、現在の芝生景観とは全く異なる水田としての空間を検証し、水田であるための水の確保について概観する。

2. 御後園の成立⁵⁾

御後園が成立する築庭工事の資料は現在みつからない。したがって、その詳細な工事過程や、なぜ池田藩がそれをつくったのかもわかっていない。岡山藩の土木工事を語るときに池田光政から綱政の藩政時代にかけて津田重次郎永忠の貢献があげられるが、津田の御後園建設の意図についても資料的に裏づけされておらず、その役割を含めて不明の部分が多い。はっきりわかっているのは、岡山後楽園に所蔵する『御茶屋御絵図』⁶⁾ (享保元年)の貼り紙に寛政十二年(1800)閏四月に御後園奉行大澤市太夫の覚書である。これには、

一、 一万七千七百三拾坪

貞享四丁卯年十二月十六日より御普請始り

元禄二己巳年春御庭成

とあるので、貞享四年(1687)から工事が始まり、元禄二年(1689)一応の完成をみて藩主の利用が始まったと考えられる。その後、庭園面積を拡大したことも同覚書にかけられており、綱政時代の庭園内諸施設の完成は元禄十三年(1700)冬とある。

御後園の位置の築庭以前の風景は、貞享年間の『御城ヨリ川上マデ絵図』⁷⁾でみると岡山城東側の旭川東岸には「小姓まち」「はま」などの農村が存在する。絵図で見る限り、旭川東岸には農村集落と田畑と思しき土地、そして竹藪がみえる。現在の後楽園が庭園の両側を川が流れているため、これは「砂洲」であり、「砂洲」の上に作られたとする見方があるが、この絵図を見る限り、そのような「砂洲」は存在せず、田野が広がっていたところを作事したと考えるべきである。このことは、後年の図面、たとえば文久三年(1863)の図面¹⁷⁾からも庭園の北から東に向けて流れる水筋は、御後園へ導水されていた祇園用水の水量調節のためのバイパスであり、庭園全体が川筋の中に独立しているような砂洲ではないことが明らかである。後楽園が「浮島」になったのは昭和九年(1934)洪水により旭川の水勢を分けるために

同十四年(1939)開鑿された「東派川」の通水によってである。御後園は、岡山城から見渡せる旭川東岸の農村地域に約十三年かけて構築されていったと考えられるが、その位置するところはむしろ「はま」という村名より啓示されるところがあるのではないか。これについては後述する。

3. 水田の変遷

元禄時代の御後園の⁸⁾図面からは初期の御後園にどれくらいの広さの水田が存在したかどうかは確定できない。しかしながら享保年間以後、御後園の記録として整備された『御後園諸事留帳』記載(以後、『諸事留帳』と略す)の田植え行事が、享保年代のその図面による広大な水田を背景に語られていることから推定すると元禄の草創期から水田はあったと思われる。御後園設立時の藩主綱政の日常を記録した『日次記』⁹⁾には、「一、御膳過 御菜園場江御越 午中刻御帰 御菜園場ニ而田うへ申、百姓共ニ鳥目十貫文被下」とあり、水田の存在が記されている。また当初の呼称が「御菜園場」¹⁰⁾であることから、当初から水田や畑があったことが推察される。

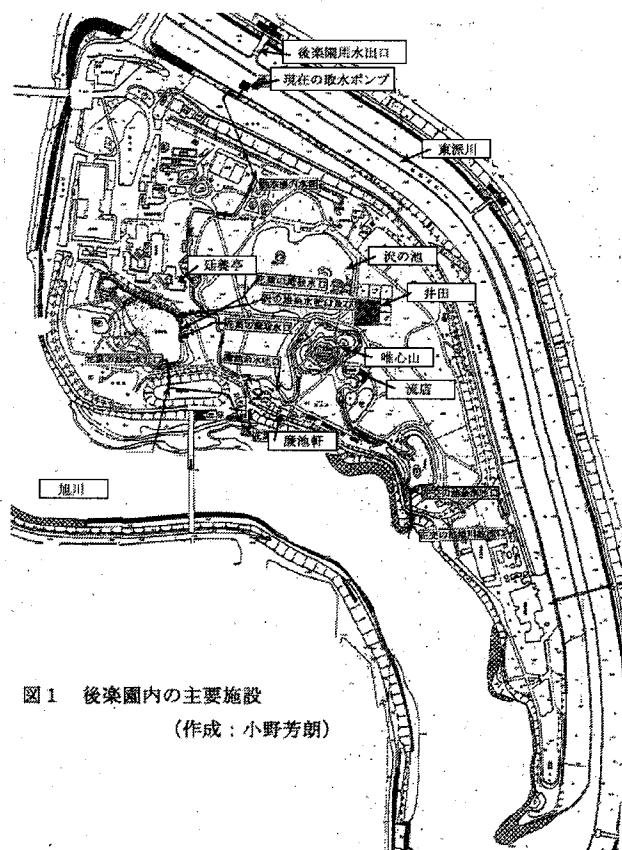


図1 後楽園内の主要施設
(作成：小野芳朗)

図-1は現在の後楽園とその主な施設を掲載した。絵図面上に水田の記載が明確になるのは、次代藩主継政の享保年間からである。継政は、父綱政時代の御後園を改修し、とくに園内中央に唯心山¹¹⁾を築くなどその景観を大きく変更した。図-2は池田家文庫の享保元年(1716)の図面¹²⁾よりおこした図面で、現在の後楽園の図面上にハッチでその面積を示した。図面左側にいくつかの建築物があり、庭に面してつきだした位置にあるのが

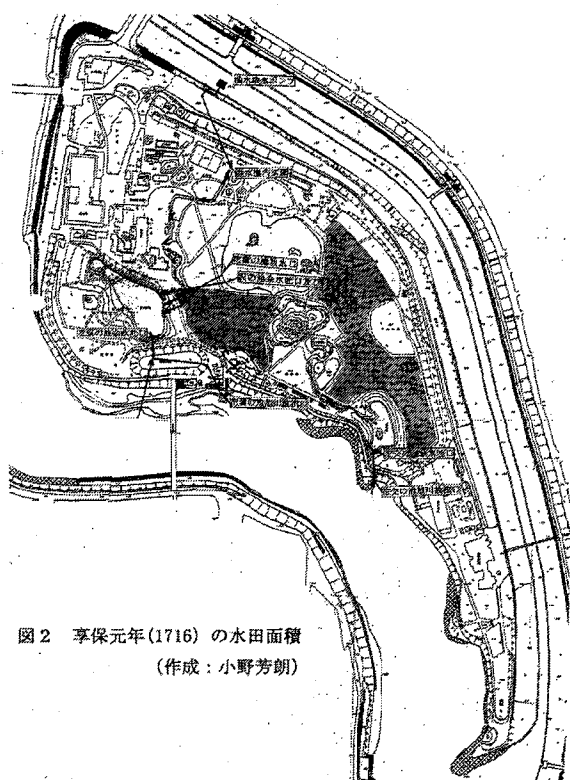


図2 享保元年(1716)の水田面積
(作成:小野芳朗)

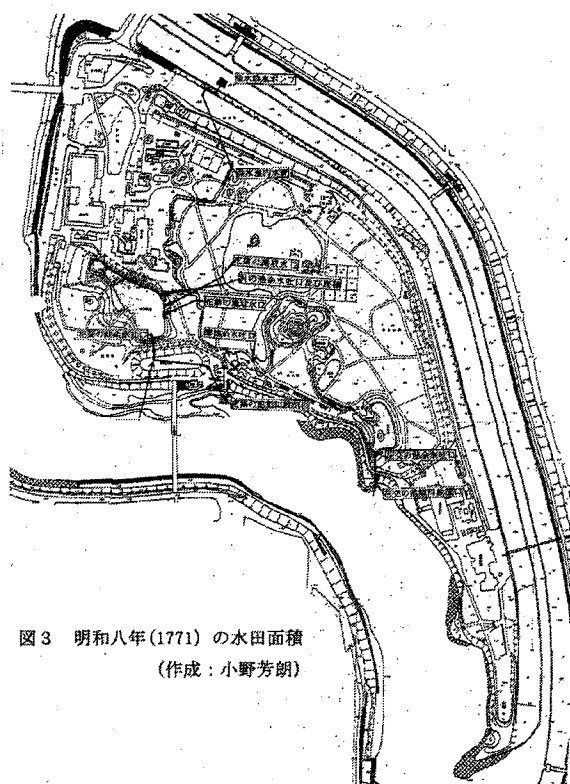


図3 明和八年(1771)の水田面積
(作成:小野芳朗)

「延養亭」¹³⁾である。そこは藩主の御座であり、東向きで庭園・沢の池を臨み、かつ東山の峰峰と、月を眺める場であったとされる。図面中央にある池が「沢の池」であり、その南に「唯心山」があり、山の南東麓に「流店」¹⁴⁾という二階建ての御茶屋で一階部分は吹き抜けで庭園内の曲水を引き込んだ建築物がある。水田は沢の池南部分(水田に面して「廉池軒」¹⁵⁾という御茶屋と池がある)と園の東部分全面であることがわかる。

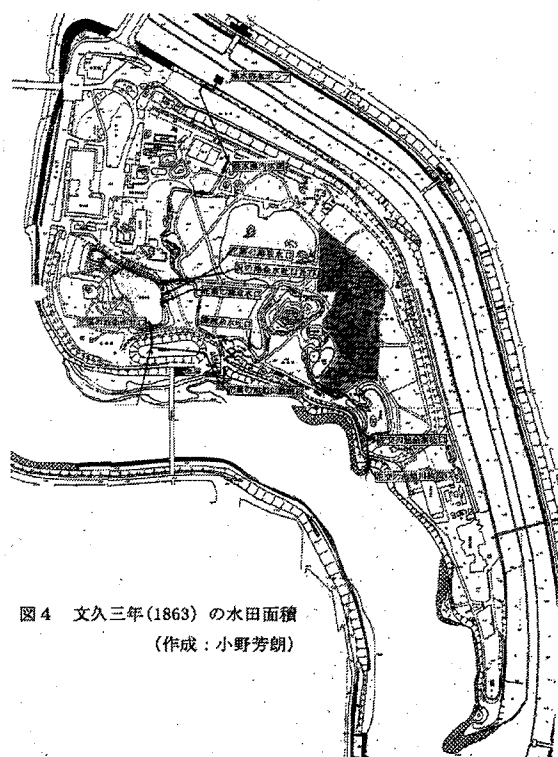


図4 文久三年(1863)の水田面積
(作成:小野芳朗)

図-3は明和八年(1771)の図面¹⁶⁾よりおこしたものであるが、水田は記されていない。宝暦十四年(1764)に藩主になった治政の時代には藩財政逼迫のため御後園儉約をすすめており、人件費を含む水田経営を縮小・停止した。明和八年九月二十八日『諸事留帳』に御作方の古長柄幸助が御免とある。この時、水田は耕作されず放置されたように思われる。一部は「芝地」との記述が明和八年の図面には読めるが、安永二年(1773)八月には、「御庭内東ノ手、一兩年引ならし相成居申候御菜園地、草多ク生出候ニ付、已前之通相応■■可被仰付哉儀」¹⁷⁾とある。唯心山東側の水田は二年間の耕作停止の後、雑草が生えていたが、従前の通りにせよと水田が復活する。

幕末の文久三年(1863)の図面¹⁸⁾図-4には園の東に水田の記載がある。このように財政的な事情は、水田の維持管理費、具体的には雇用していた農民の人件費や材料費を儉約するために耕作を一時停止した結果が、沢の池南にあった水田が芝生に変わるきっかけとなった。また東側の水田も縮小し、芝生面積が拡がることになった。

明治二年(1869)の版籍奉還で岡山城が国に接收されたが、御後園は翌三年岡山藩に返還される。明治四年(1871)二月七日、名称を「後樂園」と改め、同年七月の廃藩置県以後は池田家の隠居所として機能する。その維持管理も池田家に所属したため、経費の大幅な節減のため、水田耕作地を明治十六年小作にだし自主財源確保がめざされた。この頃の図面が図-5であり、水田面積の縮小がさらに進んでいることがわかる¹⁹⁾。この直後、明治十六年(1883)十二月に池田章政は岡山県令高崎五六宛「所有地上地願」を提出し、十七年(1884)

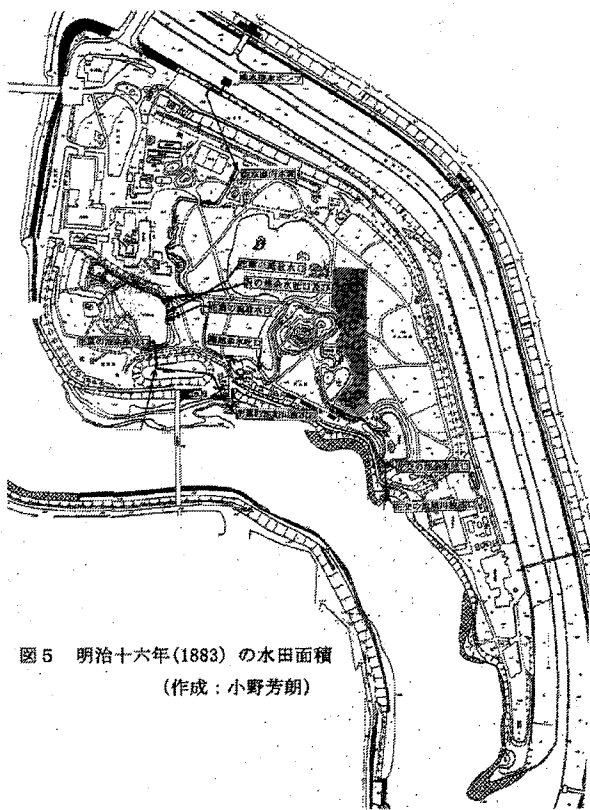


図5 明治十六年(1883)の水田面積
(作成：小野芳朗)

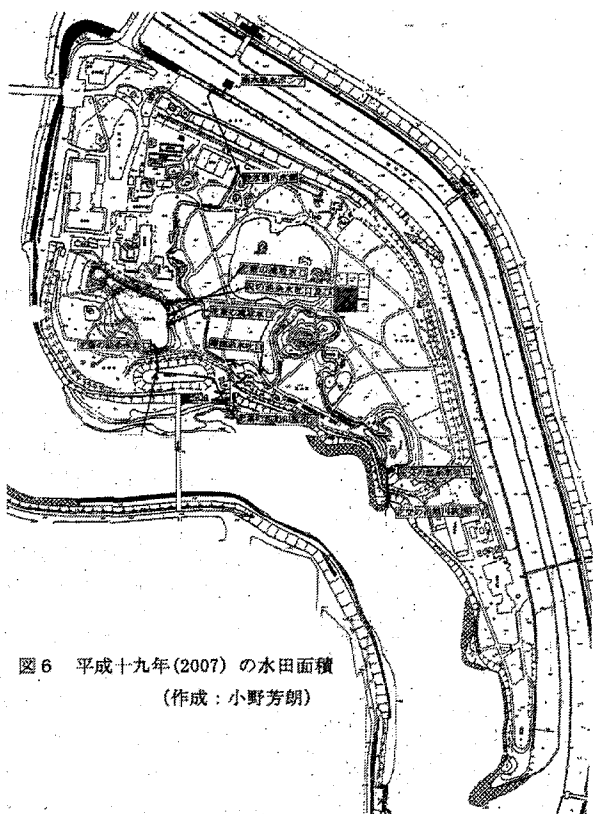


図6 平成十九年(2007)の水田面積
(作成：小野芳朗)

一月に岡山県所管となり(明治十七年一月十五日付告示第七号)、「公園」となる。小作にだされた水田がいつ消滅するのか資料上定かではないが、県に有償移譲された後、井田以外はすべて芝生地となり、「流店」から東は桜林となった。図-6に示す現代の後楽園には、「井田」として四枚の水田が耕作される。それは田植え行事として県内の田楽保存会が七月になると田植え祭を再現する観

光としての機能の水田となっている。

4. 祇園用水と掛樋

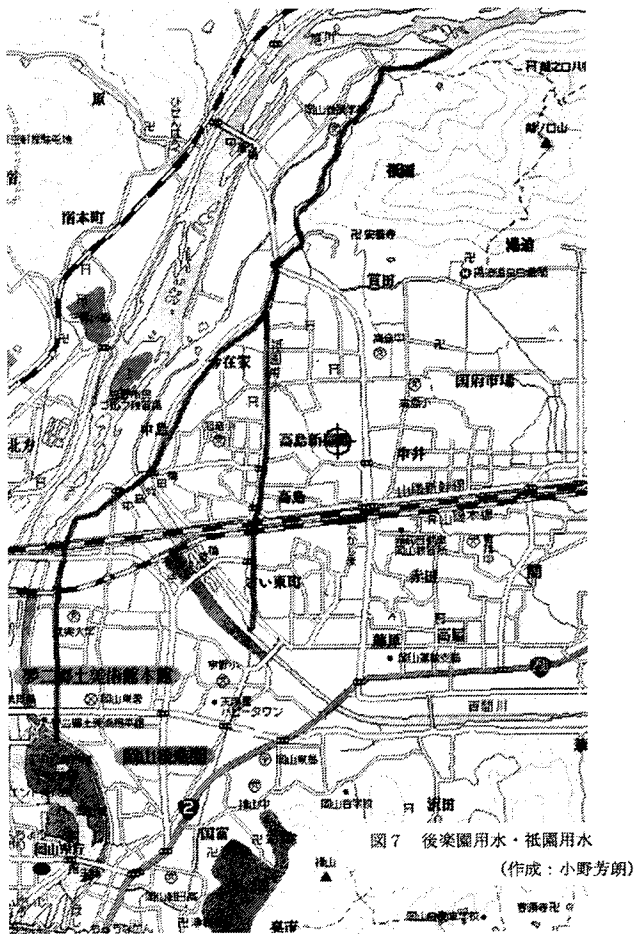
御後園は、当初より菜園つまり水田の機能を持つよう設計されたと考える。現在見える姿が河川中の中州様の場所という特殊な空間であることから、これを市内あるいは城内への洪水機能を防御する緩衝地帯であったとする論もあるようだが、前述したように御後園の建設の意図を知る資料が見出せない現状では、それを裏付ける明確な理由はないであろう。またそれは、中州や砂洲ではなかったことは前記した。『諸事留帳』にはたびたび洪水氾濫により御後園内において避難する奉行以下役人の有様が記述されているので²⁰⁾、水位があがれば水につかることがあった事実は認められる。それは川縁という位置であるからには避けがたい現象であったといえる。しかしながら洪水緩衝地帯として御後園を設置したのなら、そこに菜園を設け、また後述するように運河を開鑿してまで淡水を導水するであろうか。

菜園・水田がなぜ設けられたのかを示す資料はない。それが池田家の賄いに役立ったのか、菜園や畑の作物を売却している資料はあるため利益にはなったようである²¹⁾が、維持管理や人件費との収支をとった考察をすべきであろう。また、それが在方の管理の訓練場であった、とか品種改良も含めた農業試験場であったという推論もできるのであるが、いずれも資料的裏付けはない。多大な利益になるわけでもない生産活動で、武士の田園趣味と片付けるには規模が大きい事業である。藩財政逼迫と共に縮小していくのであるから、何らかの投資効果を期待していたと推察できる。

少なくともある意図のもとに<庭>空間に出現した水田は、当初より設計の中に組み込まれていた。それは御後園に引き入れられている用水の存在によって推定できる。

図-1で示したように現在の後楽園では園の北側より地下水をポンプで汲み上げ園内の用水源としている。これは、昭和三十年代の日本全国でみられた都市小河川の現象と同一のことが起きたためである。日本の都市部では下水道施設の普及の遅れと、農村への肥料還元システムの停止により有機汚染が河川を直撃する。かつ後楽園用水には工場排水も混入し、庭園用水の水質を保てなくなった。昭和三十九年(1964)伏流水の汲み上げが開始され、後楽園用水は旭川上流の水の近隣への農業用水機能と、その下流では近隣の都市排水を集めた排水路となり旭川へ流入している。

図-7に現在の地図上に後楽園用水と祇園用水を示すが、元禄年間の建設当初より、はるか八キロメートル北の祇園にある龍ノ口山裾の旭川上流より導水された。用水そのものの機能は山陽本線と交わるまでの上流部ではいまだに農業用水であり、水辺に降りて、水そのものを洗濯や洗浄に利用している家の造りがみられる。またコンクリート三面張りではない河川には天然記念物「アユ



モドキ」が生息する。

さて何故御後園は旭川川縁に位置しながらその近辺から用水をひかず、わざわざ八キロ離れた祇園から導水したのか。旭川の水に問題があったのか。答えは塩分にあったと考えられる。旭川は現在でも大潮には瀬戸内海から塩分が河川を遡上してくる。淡水中に陥入してくる塩水楔という現象は、後楽園周辺で塩分濃度約20%であるとされる²²⁾。その観測は、1997年10月に岡山城下で実施された。現在は旭川河口に堰が設けられているが、この堰が開くと塩水が遡上してくる。元禄時には堰など存在していないのであるから、満潮時には城下まで塩水が遡上したことが推察できる。20%という塩分濃度は、海水のそれが30～50%であるから城下の川、すなわち御後園周辺の旭川が、相当の高濃度の塩水に曝露されていたことになる。この塩分楔がどこまで遡上していたのかは明らかではない。少なくとも御後園周囲の旭川の塩分濃度は相当高くなったことは推定できる。この地域が築庭前は「はま」という村名であったことは、塩水と淡水との交わる潮目であったことを暗示するのではない。いずれにせよ、御後園周辺から用水を取ったのでは塩水により稲に塩害が出ることが想定できる。はるか北方の祇園から淡水を導入したのは御後園内の用水に塩水のはいることを嫌ったためである。換言すれば、当初から稲という水に依拠した作物を作る意図があったから祇園用水を導水したといえるのではないだろうか。また祇園用水の成立を示す資料も見つかっていないが、

元禄二年にすでに田植の記事が見られることから、御後園成立当初から用水は存在し、北方の田園地帯の灌漑用水として機能していたと推定できる。

導水された祇園用水は、掛樋による逆サイホンで御後園の土手をわたり園内へひきいれた。掛樋は明治八年の工事時に記録されたもので、総長四十八間（約八十六メートル）である。文久三年の御後園の図面²³⁾上には祇園用水の終着点、掛樋の入り口に格子状の絵が描かれている。掛樋に水が導かれる箇所に夾雑物の流入を防ぐスクリーンが設置されていたことをあらわすものである。

5. 水田の風景

それでは、その水田ではどのような光景が展開されていたのであろうか。風景としての近世の水田を表す資料は少ない。ここでは、田植祭りという祭礼に描かれた農民たちをみることで、その実態を実証し、里山の環境を再現できるものとする。

田作業は御後園が農民を雇用し実施していた。田作業の日常を記す記録はないが、参勤交代で藩主が国入りする五月、田植祭が御後園で行われた。その記録が『諸事留帳』に遺っている。いくつかの例を以下に示す。

最初は御後園をつくった綱政の子、池田継政の記録で、継政治世の享保年間より御後園の記録は『諸事留帳』の形で整理される²⁴⁾。

元文四年（一七三九）五月廿三日

一、来る廿三日、御後園ニ而御座候、早苗乙女拾五人、男五人、しろかき耆人、名主耆人罷出候様、御郡代中被仰■■候、
一、廿三日、田植、四時揃、四半時植懸ル、厚木平弥召連、罷出ル、九前ニ植仕廻、流店之下ニ而洗足仕ル、延養亭東前出シ、北へ寄踊申事、十廻り程■相済、並居、御祝儀ニ鳥目為持出、平弥相渡ス、

田植祭に参加する早乙女は十五人、城下近郊の在方の村から選ばれたと考えられる。後年の記録には、数カ所の村からひとりないし二人の女が選ばれていて実名も掲載されている。男五人とは歌を唄う者たちである。在方の「代表団」である者共は、午前九時から田植えを初め、正午頃に終了。二階建ての御茶屋「流店」の吹き抜け一階を流れる曲水の水で足を洗う。そして「延養亭」前に出て、御座にある藩主の前で踊った。図-8に「流店」と現在の田植え祭の写真を示す²⁵⁾。ここで興味深いのは流店の流れは、単なる曲水や景観としての水流ではないことである。神原によれば、元禄年間には曲水の宴が廃った頃であり、わざわざ綱政がその為の施設を作ることにはあり得ないこと、『諸事留帳』ははじめ記録がないことを指摘している²⁶⁾。その一階吹き抜けの構造は、農民の田作業後の足洗場として機能していたことがこうした「流店ニテ洗足」の記録から考えられる。実際、一階板の間は、



図8 「流店」と洗足
(撮影：小野芳朗)



板の間の中を水流が流れていき、その縁に腰掛けるとちょうど足が水流に着くくらいの高さに設計されている。
同じ継政治世時の田植の記録を以下に示す²⁷⁾。

延享元年（一七四四） 五月十三日

一、殿様、四半比被遊御入、延養亭ニ而御膳召上、田植並早乙女おとり御覧、御意ニ而、延養亭真東ノ上ニ而、間近ク半時余おとる、(中略) 殿様久振ニ御見物被遊、益御機嫌宜、八半時御立、右御祝儀ノ御吸物可被召上旨、先達而被仰出、御吸物ノ鯛みそ断置、(越しみそ、御熨斗少胡麻塩付、白餅米、御赤飯、御酒) 御田植候者へ、男女共先格之通、御用所ヨリ拵、赤飯・御酒遣ス、仕廻ニおとり候事如例、両奉行、下奉行御用所四カ所ニ而おとる、

藩主継政の様子や、その際の食事の内容、周囲の役人や出演者への褒美などが記録されている。両奉行とは御後園奉行二人のことであり、その部下の下奉行ともども御酒を下され、農民と共に踊ったという記事である。

以下は、次代の池田宗政の時の田植え祭である²⁸⁾。

宝暦三年（一七五三）五月廿七日

一、九ツ時、殿様被為入、御膳廻ル、御田植被遊御覧、御入早速御田植はしめ、九ツ半比、田植済、延養亭東南ノ方へ寄、芝ノ上早乙女とも、おとり候事二廻り程、(後略)

一、早乙女とも御田植済、前々之通流店ニて洗足致ス、

夫ヨリ踊ノ場所へ罷出ル、(後略)

一、御田植之節、和田次郎太夫、御田ノ南西角之御みちニ羽織ニ而い申、奉行齊藤覺右衛門ハ、蓮池軒前之道ニ羽織ニ而い申、以後流店ノ田植候方江兩人廻ル、早乙女踊候節、兩人上下ニ而したれ桜ノ辺りへ罷出い申、

この記事では御後園の南、廉池軒の周囲の水田（図-2）の角に奉行の二人が羽織姿にて立ち、田植えをリードした様子が記されている。

このように田植祭は藩主の江戸から帰り御国入りの直後に催されている。それは毎度ではあるが、年によっては藩主の都合（病気）により藩主不在のままの祭りや、親族の訃報（たとえば継政の実母 栄光院の死）による中止などもある。また明和年間に水田が縮小されると藩主の見物する席が「延養亭」から「流店」二階にかわる。「延養亭」周囲の水田が芝生になり、田植は東側に残った水田で実施されたからである。

6. まとめ

岡山後楽園、御後園は多様な機能を有していた。そのひとつが水田であり、現在の芝生景観で語られる「観る風景」とは趣を異にするものであり、庭園が実用的な機能をもっていたことを示した。水田の記録としては、岡山大学蔵の池田家文庫の絵図面、同『諸事留帳』にみる田植祭の記事、おなじく作物売却の記事で実証できる。田植祭は自国の五穀豊穡を藩主自らが祈る祭であったのであろうが、『諸事留帳』に記される田植祭の場面は、藩主自ら田植祭を執行するほどの位置にあったこと、在郷の農民が御後園に出入りしていたこと、日常の田作業も彼らが担っていたことなどがわかる。

水田が何のために経営されていたのかを記した資料はいまだ見つからない。しかしながら、祇園用水を導入することが淡水の確保にあったであろうこと、その作物の売却利益を御後園経営費用に充当していること、御茶屋としてのデザインも瀟洒な「流店」の機能に農民の足を洗う場を提供することがあったことなど、御後園の水田は現在の井田にみられるような神事のみで語りきれない意味を有していると推察できる。

御後園が備前池田藩にとって大名だけの楽しみのものであっただけではない、という仮説で論をすすめてきた。藩国家経営の視点で見ると菜園だけでなく、この庭園の有するさまざまな機能を経営戦略的に位置づけていくことができるのではないかと。冒頭を繰り返すようだが、なぜこの庭園が建設されたかを示す資料は未だ、ない。設計は津田永忠といわれているが、津田の備前池田藩における他の事跡、また土木・建設官僚として行動した家老以下、他の役人もあわせて検証していく必要性を展望として記す。

謝辞 本研究の展開には、就実大学元教授 神原邦男博士の多

大な示唆がある。著者が大名庭園の機能に着目し始めたのは、神原博士の御著書と御講義によるものが多い。ここに深甚の謝意を表します。また「大名庭園は藩国家の戦略的拠点ではないか」と示唆をいただいたのは東京工業大学名誉教授 中村良夫博士である。中村博士には津田永忠の評価を明らかにしていく夢を託された。果たして著者の視点が御意に合うものか定かではないが、津田を含めた「ある意思の集団」を追いかけ始めた。きっかけを与えてくださり有難うございました。

参考文献

- 1) たとえば岡山大学附属図書館池田家文庫『御後園諸事留帳』には享保年間に藩主池田継政が参勤交代で江戸に滞在している間、岡山城下の御後園（現在の後樂園）に庶民が参観を許されている。それは頻繁であり、一度に数十人から数百人規模である。ただし、男女は別の日に拝観する。またその父綱政の晩年には御後園内の能舞台に町人農民を招待し、七年間約百五十回の能で、延べ七万五千人が御後園に集まっている（神原邦男に拠る『岡山後樂園史』資料編6 2～99頁、岡山県郷土文化財団、平成十三年三月三十一日）
- 2) 白幡洋三郎『大名庭園』講談社選書メチエ、1997年4月
- 3) 網野善彦「中世「芸能」の場とその特質」、『演者と観客』所収 日本民俗文化大系 小学館、昭和五十九年一月二十日
- 4) 小野良平「小石川後樂園にみる庭園と都市との相互的關係に基づく歴史的庭園の歴史性に関する考察」、ランドスケープ研究 64(5), 2001, pp825-830
- 5) 御後園の成立と利用に関する研究は、『日記』『御後園諸事留帳』を精査した神原邦男の業績が秀逸であり、その成果は『大名庭園の利用の研究—岡山後樂園と藩主の利用』吉備人出版、2003年に詳しい。
- 6) 『御茶屋御絵図』岡山後樂園蔵、享保元年、『岡山後樂園史』岡山郷土文化財団、絵図編、平成十三年三月三十一日所収
- 7) 『御城ヨリ川上マデ絵図』、年代未詳、岡山大学附属図書館池田家文庫 T-70 T-71
- 8) 『後樂園図』、元禄二年、岡山大学附属図書館池田家文庫 T7-156-1, 2
- 9) 『日次記』元禄二年（1689）七月九日、岡山大学附属図書館池田家文庫
- 10) 『日次記』元禄二年六月十六日、岡山大学附属図書館池田家文庫
- 11) 唯心山。築堤当初の綱政時代には存在しなかったが、享保八年（1723）、生母栄光院が江戸から岡山へ帰城するにあたり、庭園中央に出現した丘。
- 12) 『御後園地割御絵図』、年代未詳とあるが、岡山後樂園所蔵の享保元年図面、前記6）とほぼ同じ地割をしている。岡山大学附属図書館池田家文庫
- 13) 延養亭。築堤当初より存在する御茶屋で藩主の御座所がある。御後園へ藩主が渡ったときの生活の場がこ

こで、御茶室「臨漪軒」や能舞台が増設され芸能の場ともなる。

14) 流店。築堤当初より存在する一階吹抜の二階建て茶屋。一階部分に庭園内の水を引き込み、三河の八橋の見立ても当初から図面上に見える。

15) 廉池軒。庭園南に当初より建設された御茶屋。亭前に池を有し、その前は当初は「山田」と記されているので水田の中にあった御茶屋である。田植祭はこの御茶屋の前で行われている記事がある。

16) 『御後園絵図』明和八年、岡山大学附属図書館池田家文庫 T7-124

17) 『御後園諸事留帳』翻刻版、安永二年八月八日、神原邦男編、吉備人出版、1999年

18) 『御後園絵図』文久三年、岡山大学附属図書館池田家文庫 T7-123

19) 『備前国岡山後樂園真景図』明治十六年、岡山大学附属図書館池田家文庫 T7-122

20) 『御後園諸事留帳』翻刻版 たとえば元文元年五月廿六日「雨降、昼刈大雨かみなり、夜中降、廿七日迄昼迄降、同日洪水」や、元文三年五月十二日「昼比刈俄水出、夜入満水」、など梅雨時の洪水記述は散見される。神原邦男編、吉備人出版、1999年

21) 『御後園諸事留帳』翻刻版 宝暦十一年九月朔日大豆売却、同年十月十八日胡麻売却、十一月朔日餅米売却など、神原邦男編、吉備人出版、1999年

22) 戸根智弘『旭川の河口密度流に関する研究』岡山大学工学部特別研究、平成10年2月、岡山大学環境理工学部環境デザイン工学科書庫蔵

23) 文久三年絵図17)の用水が御後園に流入する北側から伏せ越しの掛樋に入る直前に、バイパスが設けられ水門が設置されている。掛樋には格子状のスクリーンにより大型の物体を除去した後で水が流入していく。

24) 『御後園諸事留帳』翻刻版 元文四年五月廿三日、神原邦男編、吉備人出版、1999年

25) 『流店御絵図』、年代未詳、岡山大学附属図書館池田家文庫、T7-151

26) 神原邦男『大名庭園の利用の研究—岡山後樂園と藩主の利用』吉備人出版、2003年、27頁

27) 『御後園諸事留帳』翻刻版 延享元年五月十三日、神原邦男編、吉備人出版、1999年

28) 『御後園諸事留帳』翻刻版 宝暦三年五月廿七日、神原邦男編、吉備人出版、1999年